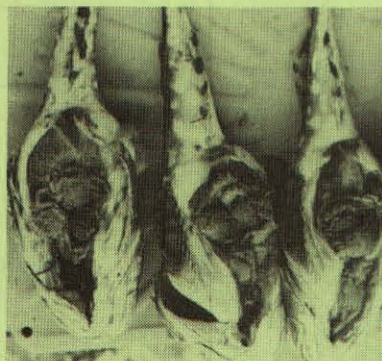


釧路水試だより

42



上図：腹面全体図
右図：胃袋拡大図



オクカジカ(シラミカジカ)の胃中より発見されたケガニの子ども

-
- 御挨拶をかねて
 - ブナ・ホッチャレ語源考
 - ウニ類の標識方法
 - ケガニの分布と移動
 - 転勤・着任の御挨拶
-

昭和53年10月

北海道立釧路水産試験場

ご挨拶をかねて

場 長 小 杉 寛 夫

道東の秋漁を代表するサンマの漁況も好調に推移しており、まことに御同慶に思います。この八月に奥田前場長の後任として網走水試から当水試へ勤務替えとなり、着任してから早や二ヶ月近くになります。この間何かと用務等にまぎれ、関係の方々に御挨拶を申し上げていない向きも多く、まことに失礼でございますが紙上をかりまして御挨拶申し上げます次第です。

釧路へ参りましたお話しを伺っている中からも、道東地方は今二百カイリ時代の大波をモロに受けており、これからの漁業のあり方を見極めながら新しい漁業秩序へ向けて諸問題の解決を図り、漁業経営の安定化を進めていかなければならない漁業情勢の厳しさを一層強く感じております。このような漁業の現実に対して、試験研究の分野としての重責に心を新たにいたしております。とくに三支庁管内に亘り多様な道東地方の漁業事情等につきまして、管内の皆様から御教導をいただきながら道東地方漁業の安定と振興のため努力し

て参りたいと考えておりますので、よろしく御支援と御鞭撻の程をお願い申し上げます。

さて、我が国二百カイリ水域内の資源の見直しとともに、今沿岸漁業に多くの関心が寄せられております。広大な沿岸海域をようする本道においても、沿岸漁業生産の拡大のため魚礁漁場造成、増殖場、養殖場の整備等沿岸漁場整備開発事業が進められております。

この度、この事業の一環として厚岸周辺海域総合開発事業の調査が実施されることになりました。海域総合開発調査事業とは、実験漁場を設定し、その中で現在まで開発された増養殖技術、開発されつつある漁場造成技術などと、これに漁場管理、漁場利用、生産等のシステムを組合せて、その海域に最も適した魚介類の生産を最大限に増大させるシステムを作ろうとするもので、全国四ヶ所の中の一つとして、厚岸周辺海域が対象になったわけです。

増養殖技術については既に開発された技術も多いのですが、この海域総合開発事業を進

めるには、海の中の生物生産のしくみを始め基礎的にも技術的にも多くの未解決の問題があることは申し述べた通りでもありません。このことについては、この事業に関連して水産増養殖総合技術開発事業（具体的技術開発）、海洋牧場技術の開発に関する総合研究（基礎研究）が進められるようであります。

ともかく、海域総合開発事業の目的達成のためには今後多くの試行錯誤を経なければならぬように思われます。いづれにしましても漁業者自身が、漁業者のものとして効率の高い生産の場を作り上げていくという積極的な構えが大事なことでなかろうかと思う次第です。当場も厚岸周辺海域総合開発調査事業の一部を分担することになり、既に調査に取り組んでおります。関係の方々には何分よろしく御協力をお願いいたします。

（一〇月一日記）

ブナ・ホツチャレ語源考

加工部相沢悟

サケは外海から産卵のため母河川に近づくにつれ表皮には婚姻斑があらわれ、美しい銀白色から黒褐色に変色度を増し、流麗な体形も背が張り出し、口吻は曲り歯牙がするどく変形し、さらに筋肉は水分が増し蛋ばく質と脂肪は急減して利用価値の低下を来たすことは良く知られています。

これらの変化の度合によって、ブナサケとかホツチャレサケと呼称されるのも周知の通りです。

秋サケの来遊が史上空前と云われた昭和五十年頃から、ブナ・ホツチャレの利用加工が提唱され、私どもも標津・根室産のものについて利用加工上の調査試験を行い報告（昭和五十一年度釧路水試事業報告書）したところでありました。さてこの生態別の呼び名であります。さてこの生態別の呼び名であります。まず銀毛・ブナ毛・川ブナ・ホツチャレと四群の名をもち、さらにブナ毛ではその度合に応じてA・B・C・川ブナ（特に雄）もA・Bに分別され、これに大小、雌雄別という具合に相当の熟練がなければ識別が困難な程複雑なものです。

しかしこれはいかに秋サケと日本人のかかわりが強いかを物語る尺度でもあろうかと考えられます。元来日本人は米食民族であり欧米人等の肉食民族とは食構造を異にし魚食民族とさえいわれる程で米を主食とする限り魚は不可分なものであり、一魚種でもブリのように成長段階別にイナダとかハマチ等五種類の呼び名をもったのも、また近年豊漁が続くマイワシにしても方言でみれば東北・北海道ではナナツボシ、瀬戸内、高知ではヒラ・ヒラゴ、さらにラシ（浜名湖）、カブダガ（和歌山）、もちろんこの外に大きさ別の呼び名をもっています。このように日本人の食生活と強いかかわり合いをもち食文化の基盤をなしていると思われ、どうしても細かく分けこれに、一つ一つ名称をつける必要のあったことがうかがわれます。

サケも同様で春に獲れるものをトキシラズ秋に獲れるものをアキアジ、そして標準和名がシロザケと呼ばれ、この学名はオンコリンカス・ケタと呼称されています。

アメリカの新聞記者であるアントニー・ネ

ットボーイはその著書、ザ・サーモンの中でこのオンコリンカスとは「曲った鼻を意味する」とあり、また同書には産卵後のサケをカナダでは、ブラック・サーモンと呼び、カムチャッカでは「短剣のような歯をもった魚」という意味のランセット・フィッシュと呼ばれていたと書いてあります。

このように魚の行動あるいは姿形、色彩等の状態から名称づけられることが多く、細かな状態観察を通じて命名されることを示しているものと思います。

さてそこでブナとホツチャレを区別することはその性質上、利用上から分別されることは理解されますがなぜ、ブナ・ホツチャレとどうかについては漁業、加工関係者に聞いてみても、アイヌ語ではないか、いや日本語のはず、また土地の古者は昔からブナはブナ、ホツチャレはホツチャレでありそれ以上のことは判らぬ、という具合に一向に判然としません。

北海道出身の民族学者、藤本英夫氏が雑誌アニマ（平凡社・一九七七年・二月号）に投稿した、サケ文化史の中で、ブナの語意にふれ、サケが「上流にいくにつれ皮膚は暗黒色になり、ちょうどブナノキの色に似てくるので「ブナっ毛」と呼ぶ」とあり、さらに「アイヌはベテチ（川・で・煮える）」といっている。と記述されブナとはアイヌ語でなく日

本語であることを示してあります。

ブナノキは北海道ではほとんど見られませんが裏日本にはブナの原生林があるといわれこのあいだを流れる川をサケが遡上したとすれば、そのコントラストからしてイメージが一致するだろうことは容易に理解できます。私も夏のブナノキを一度だけ見たことがありますが、ブナサケの班紋とブナノキのそれは良く似ていますが色彩ではブナサケの方が赤味を呈していると感じます。しかしサケはブナノキが紅葉する時期に川に遡るもので、あるいはブナノキの肌も色づくのではないかと思われこの説が正しいのではないかと考えています。

ホッチャレについては普通「ホッチャレ(老魚)」と記述した書物が多く、あたかもホッチャレとはアイヌ語で老魚を意味するかのよう的印象づけられますが、釧路市史編さん事務局長の布施正氏によれば、元北大の犬飼教授がアイヌ民族史の一節に「ホッチャレ(日本語)」と記述してあるという。

先きの藤本氏はサケ文化史の中でホッチャレにふれ「放卵、放精を終えたものをホッチャレというが、アイヌはその状態からオイシルチエブ(尾を・物がこすった・鮭(尾のすりされた鮭))、オンネチエブ(老いた鮭)、とくにメスをチボルサク(腹子を・持たぬ)といっている」と記述してあり、犬飼教授同

様ホッチャレの語はアイヌ語でないことを明確にしています。

少々横道にそれますが、先きのサケ文化史ではメフンにもふれ桓武天皇の都(一二〇〇年前)長岡京跡から発見された「鮭背綿と書かれた木筒があり、木筒とは古代日本の役所で紙の代りに使った木札で物品を送るときに荷札にもなった」とあり「鮭背綿はアイヌ語でいうメフン(腎臓)である」としています。どうやらメフンはアイヌ語をそのまま現在も使っていることになりました。

さらに「これらは北陸地方からもたらされたもので高貴な人の贅沢な食品」であったようです。北陸地方はブナノキの多い所でさきのブナの語は北陸地方の和人が北海道にもたらしたのではないのでしょうか。

さて話を元にもどし、アイヌ語でないホッチャレとはどこから来たのでしょうか。その手掛りは容易につかむことができません。

北陸地方越後に生れた鈴木牧之は天保年間(一八三〇—二二六)で出版されています(岩波文中下之巻「鮭の始終」の項に産卵の様子が書かれ、この中で土地の漁師はこの様態を「掘りつく、ざれにつくともいふ」とあり註釈に「沙をはるにさまざまのかたちをなすゆゑ、ざれことのざれならん」と記述がなされ、サケが産卵のため砂を掘る行為とその状態を掘

り・ざれと土地の漁師は表現したというものです。

さきに書きましたとおり、ブラック・サーモン、ランセット・フィッシュユ、オンコリンカス、ブナ等々いづれもその状態から名称がつけられていることと照し合せ考えれば、ここにいうホリ・ザレが北陸地方から北海道に渡り定着される過程でホリ・ザレがホッチャレに転訛したのではないかと考えられるのですがいかがなものでしょうか。

北大の大石助教授は「コンブの本」の中で北海道のコンブは昔北陸經由で若狭小浜等に運ばれたとあり、北陸と北海道はこうしたルートで可成の交流があり北海道に漁業文化をもたらしたと考えられ、ブナと共にホッチャレの語も北海道に來たとしても不思議ではありません。

また北越雪譜にはサケの受精卵をカメに入れて漁の少い清流にこれを放せばサケが増えるだろうとも書かれてあり、今から一五〇年前に自然科学者でない著者が精確な現象把握によりこれを予見しててまさに達見であると感じさせられます。

厚岸の北大理学部附属臨海実験所に通じる下り山道の中間に大小二本のブナノキがあり、紅葉の時期には木肌の班紋が色づくものかどうか一度自分の目でたしかめたいと思っております。

(八月記)

又サナー
してくさい

二類の標識方法

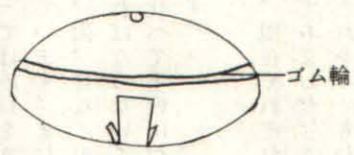
増殖部 滝

裏

最近、多くの漁業協同組合地先でウニの生産増強を図るために、身入りの悪いウニを身入りの良いウニの棲息している漁場に移植することが盛んに行なわれるようになって来ました。しかし、移植効果の有無については大部分が極めて莫然としており、移植事業そのものが機械的に行なわれているにすぎない場合も多いようです。この移植の効果をはっきりさせるには移植ウニと在来ウニとを区別し、その身入りを比較することが大切です。このためにはそれぞれのウニに標識を行なうのがよい方法ですが、標識方法そのものに一長一短がありますので、ここでは各種の標識方法と、その長所と短所を述べてみたいと思います。

(1) ゴム輪をはめる方法

これは第1図に示すような方法で、ゴム輪をはめたエゾバフンウニを水槽に入れて観察しますと、元気のよいものは大体3〜6時間位で上手に棘を動かしてはくれます。元気の少々わるいものでも2〜3日間位でゴム輪をはずしてしましますが、ごく少数のものははずさないでいる場合も

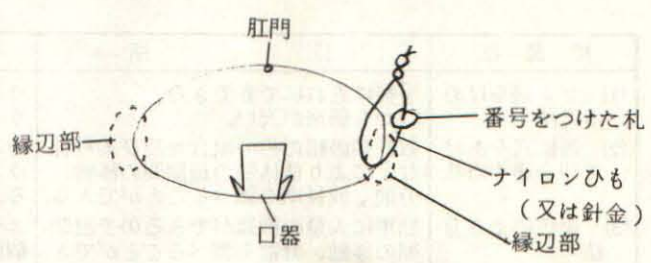


第1図
ゴム輪をはめる方法
(ゴム輪を鉢巻状にはめる)

あります。従って、この方法を用いた標識はあまり効果がないようです。

(2) 殻に穴をあけ紐を通す方法

この方法は第2図に示すように、キリや太い木綿針などで殻に穴をあけて紐を通す方法です。通す紐の色、標識札の番号などにより個々のウニがそれぞれどれ位生長したかと言う個体の見分けができます。殻の穴をあける場所はなるべくウニの殻の中心から離れたへりの部分が適当です。そうでなければ、ウニが死んでしまうことがあります。しかし、殻に穴をあけて紐(または



第2図
殻に穴をあけ紐を通す方法
(肛門と口器より離れた縁辺部に穴をあける)

針金)を通すこの標識方法ではウニの成長がさまたげられると言う報告がある反面、影響を与えないと言う報告もあります。

この方法は標識技術の上手、下手による死亡がありますが、長時間にわたって標識札が落ちないので個々のウニの長期間の移動、移植した地点からの移動経路、拡がり具合などを調べるためには適当な方法と思われれます。

(3) 染色による方法

これは10リットル当り1〜5%の濃さのナイルブルー溶液に約1時間程ウニを浸け殻全体をブルーに染める方法です。それで染めないウニと染めたウニとは容易に区別できます。しかし、この方法は簡単に、しかも大量に標識ができる反面、4〜5ヵ月程でほとんど色があせてしまうことと、個々の識別ができない欠点をもっています。また、紫色をしているキタムラサキウニ（通称ノナ）には同じような色なので使用することはできません。

最近、ナイルブルーのほか中性赤、メチールブルーなどの色素での試験が行なわれましたが、ナイルブルーを用いて染めた場合と同じような結果でした。また、この方法も前記(2)の殻に穴あけて紐を通す方法と同じく、ウニの生理の状態や染色液の濃さによってウニに対する影響が大きく現われる場合があります。この方法は短期間の移動、成長、移殖の効果などを調べるのに適当と思われます。

(4) 体内標識方法

この方法は一定期間内の成長量、骨格の形成過程、年令などを調べるために用いられ、耳石、鱗、脊椎骨などに標識する方法です。従って、前記(1)〜(3)までの方法と違って標識を行なったウニと行なわなかったウニとの区別は外見上ではできません。

この方法に使用する薬品は錯酸鉛、アリザリンレッドS、アクロマイシンなどですが、いづれも生物体の硬組織（例えば骨、鱗、歯、貝殻など）の成長の行なわれている部分にだけ沈着する性質がありますので、これを応用したものです。水槽のなかでは単独に用いられることもありませんが、外見上標識しないウニと区別ができませんので前記(2)・(3)の方法と併用すると漁場における標識に便利です。

この方法は成長量、成長部分などを短期間に正確に知ることができる長所を持っている反面、ウニの体内に注入する薬品の量によっては成長をさまたげるという短所を持っています。また成長量を調べるために貝殻、歯、骨などの薄い顕微鏡標本を作らなければならぬことなど前記(2)・(3)の方法に比べて手軽に行なえない欠点を持っています。

以上、現在それぞれ行なわれている標識法を述べてみました。これをまとめたのが別表です。これをもてみるように、いづれの方法も長所と短所を持っており、これが一番よいのだという方法はありません。従って、ウニの標識放流を行なう際には、それぞれの目的に合せて二・三の方法を併用するのがよいかと思えます。

別表 標識方法の長所と短所

標 識 法	長 所	短 所
(1) ゴム輪をはめる方法	手軽に誰れにでもできる。しかも価格が安い。	ウニ自身が棘を動かしてはずしてしまうこと。
(2) 殻に穴をあけて紐を通す方法	数種類の紐の色の組合せ及び番号札などにより個体別の長期間の移動、分散、成長率を調べることができる。	殻に穴をあけて紐を通すので標識しないウニに比べて、標識ウニの成長がにぶること。
(3) 染色による方法	簡単に大量の標識ができるので短期間の移動、分散を調べることができる。	2〜3ヶ月位で褪色すること。個体別の成長、移動を調べることができないこと。
(4) 体内標識法	体内注入許容量以内であれば、上記(2)・(3)に比べて最も確実に標識が行なえる。殻の成長を調べるためには最もよい方法で短期間に成長量を知ることができる。	注入許容量を越えると死亡する。外見上標識しないウニと区別がつかないこと、手軽に行なえず殻の薄片を作って顕微鏡観察を行なわなければならないこと。

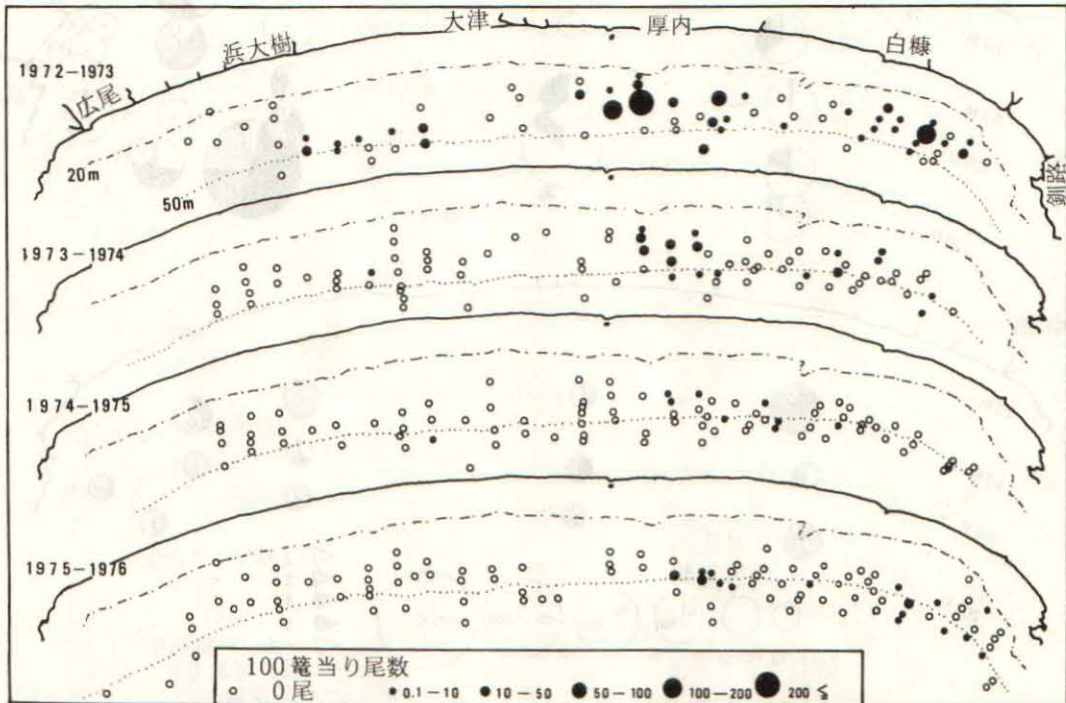
ケガニの分布と移動

漁業資源部 阿部 晃 治

釧路市以西の釧路、十勝両支庁管内海域におけるケガニ漁も、およそ5カ月間の禁漁期を終えた9月1日から一部漁業によって再開されましたが、漁模様は悪く、また許容漁獲量も前年度と同じく最低の七〇トンとなっております。ところでこの不漁も来年度には好転することが予想されております。と言いますのは、来年度には最小商品体長（満5才）となる49年発生群が多量に出現しているからです。しかしこの群の存在を、漁業を通じて十勝方面の漁業者は気付いておりませんが、釧路方面の漁業者は気付いておりません。このように漁場が異なる漁業者間に認識の違いが起る理由は、ケガニが発育段階や生活周期の違いによって生息場を変えながら生活しているためです。このことはケガニの生活を知る上でも重要なことなので、次に順を追って説明していくことにします。

一、抱卵親がにの分布

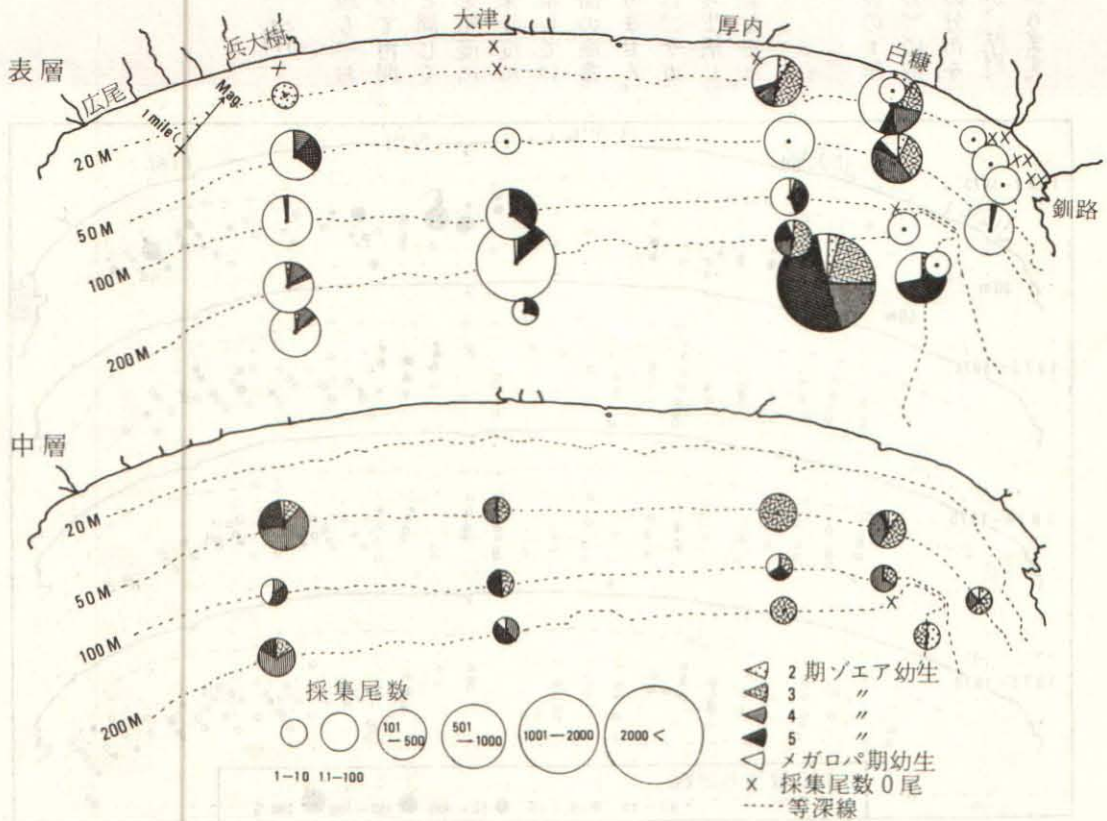
雌は11月から翌年3月にかけて産卵を終えますが、その後の1年から1年5カ月間は卵を自分の腹部（俗に褌と言われる部分）に抱えて保護しながら生活を続けております。この時の抱卵雌の分布をみますと（第1図）、年によって量的な違いはみられますが、厚内、白糖、釧路沖などの東側海域に分布の中心があることがわかります。



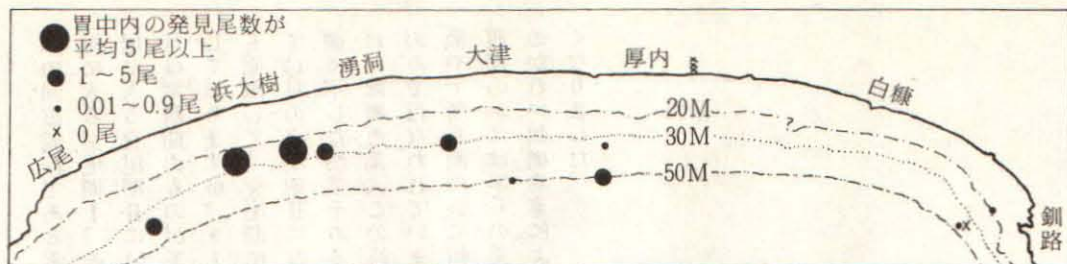
第1図 2～5カ月後にふ化する卵を抱卵中の雌の分布（11月～翌年2月）

二、浮游幼生の偏西漂移分散と着底水域

抱卵されていた卵は4月頃に一斉にふ化をします。生れたばかりの幼生は約2.7mmでゾエア幼生と呼ばれますがこの幼生は次々と脱皮により成長、変態を行ないゾエア幼生を5期、最後にはメガロバ幼生となります。幼生は約3カ月間浮游生活をおくりますが、この時の6月の分布をみますと(第2図)、親がによりも西側海域(浜大樹寄り)や沖合へ広く分散しております。量的には中層よりも表層に多く、釧路や大津沖などの海底地形が原因して起こる湧昇流周辺に密集しております。また質的には発育段階の進んだ幼生の出現率が中層よりは表層に、東側海域(釧路寄り)よりは西側海域に、そして東側海域でも深みよりは浅み寄りに高いことがわかります。7月早々にはこれら浮游幼生は最小成体型へと変態し底棲生活に移行しますが、この場所は浮游中の幼生が多量に出現した深みではなく、ごく岸近い水深が20~40m位の浅みです。さらに、第3図からもわかるように、この着底後の0才群の主な分布は親がにとは反対方向の浜大樹沿岸を中心とした西側海域にみられます。つまり、主として東側海域でふ化後の自力で泳ぐことの出来ない幼生は、海洋環境によって支配されながら漂移分散し、多くは西側海域の浅海域へ辿りつき、そこで集合して底棲生活に入るわけです。この場合の海洋環境についての知見はまだ不十分なので、浮游幼生の移動のメカニズムを明らかにする上で、私達の重要な研究課題となっております。



第2図 浮遊幼生の発育段階別の分布 (1974年6月11~25日)

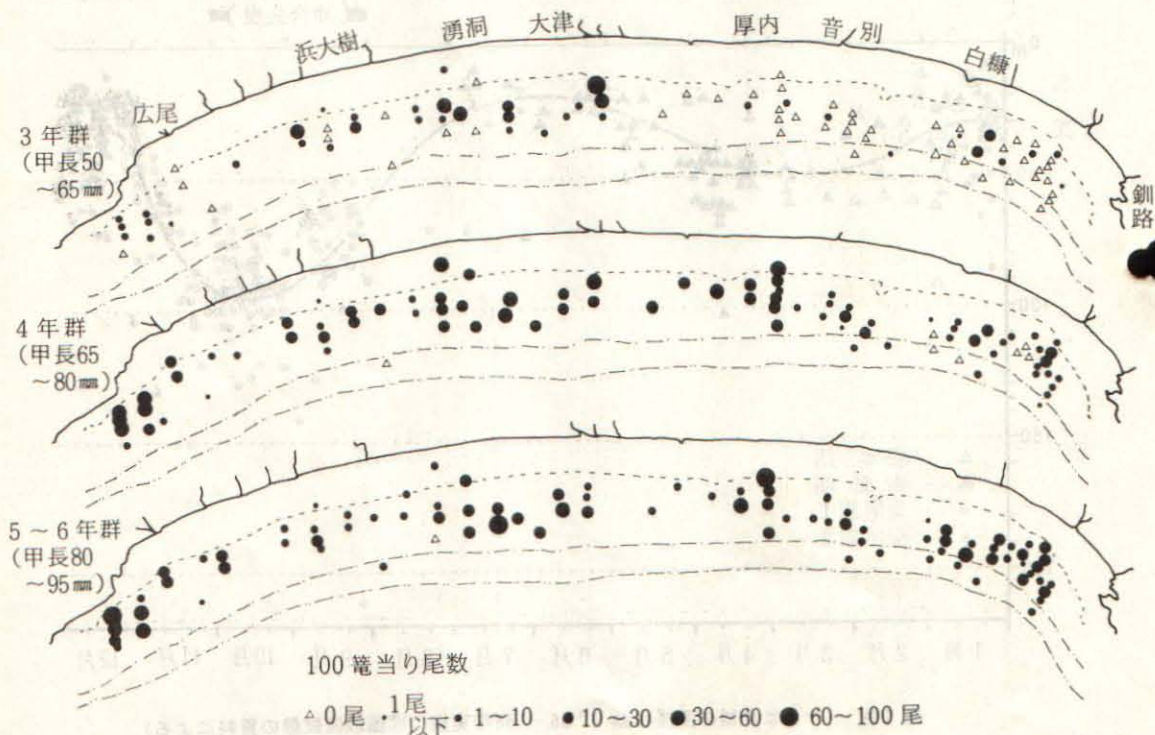


第3図、オクカジカ(方言シラミカジカ)とクサウオ属〔(方言ドンコ、ジョンジョロ等)水深50m線のもの〕の胃中より発見された0才群の分布(1974年12月~'75年1月)

三、成体群の東向移動

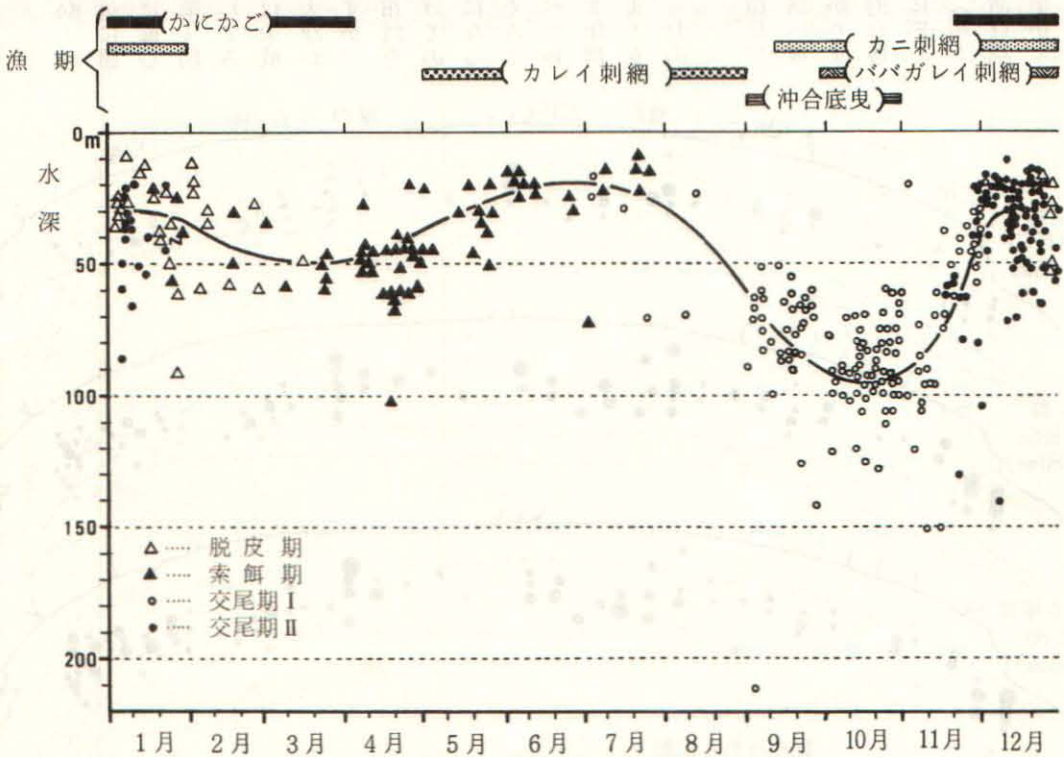
ケガニは満3才で雄は甲長が50~65mm位、雌は50~60mm位となり成体に達します。第1図に抱卵雌の東側に偏した分布を示しましたが、さらに第4図に成体雄の年令群別の分布を示してみました。これによると3年群では未成体群と同様に西側海域に、特に大津から浜大樹沿岸にかけて多いのですが、これが4年群になると東西へ分布域を拡大し、特に広尾から厚内にかけての十勝海域で多く、さらに5年群になると釧路沿岸まで密度が高まっていくことがわかります。なお冒頭で述べた49年発生群というのは、この図の3年群のことですから、分布域から考えても釧路方面の漁業者が気付かなかったのも無理のないことと思います。

このように成体がには、浮游幼生とは逆に、西側海域から東側海域へ成長と共に移動していくことがわかりましたが、次に周年における季節的な移動をみると、ケガニの生活周期に応じた深淺移動が行なわれています(第5図)。成体雄がにの1年間の生活は脱皮期、脱皮後の軟甲がにから堅甲がに



第4図 ケガニ雄の年令別密度分布(1977年12月)

への回復過程である索餌期、主に産卵経験のある高令雌との交尾に入る交尾期Ⅰ、そして主に産卵の経験のない若い雌との交尾に入る交尾期Ⅱに分けられます。1～2月は脱皮期、3～8月は索餌期のもが多く、比較的浅みの水深20～60m位に生息しておりますが、9～11月には交尾期Ⅰとなり、浅海域の昇温も原因して、交尾期に入った雌と共に深みへ移動します。そして12月の交尾期Ⅱになると、再び浅みに戻ってきます。図の上欄に示した漁業をみると、深みへ移動した時は沖合底曳網やかれい刺網漁業（この時期のかれい刺網漁業は釧路支庁管内海域のみで行なわれています）で、浅みに移動した12月からはかに籠や十勝方面のかに刺網漁業で漁獲されております。なお、索餌期のかには甲らの柔らかい水が多いのですが、この時期のかれい刺網漁業によるケガニの混獲は、最近では非常に少なくなりました。



第5図 ケガニの雄の深淺移動（'66～'68年実施の標識放流試験の資料による）

ご挨拶

中央水試場長

奥田 行雄

昭和四十八年四月釧路に赴任してから、この度中央水試に転勤するまで五年四ヶ月、この間大したことも出来ませんでした。管内関係者の方々、仕事を通じて関係のあった全国関係者の方々等のあたたかい御理解と御指導、そして釧路水試職員各位の心からの御協力によって、大過なく過ぎていただきましたことを、この機会に厚く御礼申し上げます。

釧路での五年間、皆様方には色々と御迷惑をおかけしたと思いますが、私にとっても家族にとっても思い出多い期間であり、長いようでも短かったというのがいつわらざる心境です。

ふりかえってみると色々な出来事が思い出されます。仕事上のこと、時間外交遊のこと、色々ありました。しかし全てがなつかしい思い出として浮んでくるという事は、やはり皆さん方が私をもちたて協力して下さいましたお蔭であると感謝しております。

こちらに来てまだ短い期間ですが、生活面で感じたことは、果物のおいしいこと、野菜の生きの良いこと、魚の少ないことです。余

市周辺は本道における果物の産地として知られているだけに、来た当時のメロン、このごろが盛りの葡萄は、道東での味とは違ったうま味をもっているようです。しかし私達家族が一番こたえたのは、鮮度の良い魚の少ないことでした。丁度夏枯れと言った時期的な関係もあったようですが、やはり消費地ではないことが大きな原因かも知れません。隣の小樽市の市場に行くと、結構鮮度の良い魚が各種並んでいるのですから。こうした面から、やはり消流機構ということを考えさせられています。

本道の水産業も新しい海洋法時代において沢山の問題をかかえており、これからも色々な問題が起ると思います。とくに道東はこれらの影響をまともに被るだけに大変だと思えますが、皆さんの創意工夫と熱意によって、日本の蛋白供給基地としての地位をさらに固めてゆかれることを祈っております。

(十月五日記)

釧路在勤を振り返って

網走水試場長

内藤 政治

釧路水試に赴任したのは昭和四十二年の春で、早々に手掛けた仕事が試験調査船北辰丸

の建造でした。

当時は沿岸、沖合、遠洋漁業を問わず漁船の大型化や装備の近代化が目覚ましかったし、北洋にしん刺し網漁業が開始され、その裏作として大型いか釣り漁業が登場するなど水揚げ日本一の基盤が着々と固められていましたし、間もなく西港の着工をみるなど、静かな日本海側から来た者にとっては、正に圧倒されるような活気に溢れていました。道東に春を告げるさけ・ます調査船の一斉出港・引続くさけ・ます漁船、そして秋のさんま漁船の一斉出漁は壮観そのもので、いつまでも忘れ得ぬ光景ですが、同時にその前後の部内の騒然たる忙しさも懐しく思い出されます。

しかし、四十年代後半以降になると、ご承知の通り年を追って国際規制が強化され、オイルショックそして二〇〇海里時代へと急転直下情勢が変化しましたが、道東ではその打撃が大きかっただけに、地域ぐるみで対策が論じられました。従って、水試も事ある毎にそれに参加し、以前にも増して多くの人々と接することになりましたが、その忙しさの中からも多くを学ぶことができました。

もともと、釧路水試には誰にでも気軽に門をたたけるといふ伝統的な良きムードがありましたから、立地条件の良さも手伝って、船や地元業界の皆さんを始め、全国各地からの来訪者が相次ぎました。従って随分忙しい思

いもしましたが、それを補って余りある貴重な資料や情報と共に研究への良き刺戟を得ましたし、こうした交流を通じて数多くの知己を得たことも何よりの幸いでした。また、赴任早々に始まった日ソサンマ共同研究会議への参加、部の皆さんの海外漁業視察等々直接、間接に見聞を広める機会にも恵まれました、まさに日本有数の漁業地帯ならではの貴重な体験をすることが出来ました。

今、釧路を離れてその重みが一層痛感されますし、改めて釧路在勤中に賜りましたご厚誼に対し、厚くお礼申し上げます。

皆様の益々のご発展を祈念いたしますと共に、一層のご指導、ご鞭撻をお願いいたします。(一〇月七日記)

釧路を離れるにあたって

中央水試増殖部長

田 沢 伸 雄

今夏は道東地方では珍しい猛暑になり、涼しい夏に馴らされてきた私にとって幾年ぶりの夏らしい毎日でした。私こと

この度八月三日付で中央水試増殖部長を命ぜられました。昭和四七年四月二四日付で稚内水試より釧路水試増殖部長として赴任してきてから満六年と三ヶ月余り大過なく業務を遂行することが出来ましたことは、皆様方の暖かい御厚情のたまものと心から感謝しており

厚く御礼申し上げるとともに、皆様方の御要望に充分応えることの出来なかつたことを深くお詫び申し上げます。

二〇〇海里漁業水域設定に伴う漁業秩序の再編成が急速に進展している現在、本道周辺漁場の生産性の向上と地域漁業の安定した立地条件の整備開発が強く要請されており、これに因應するためには合目的な生産構成をもった生産性の高い漁場を造成するとともに、漁場の維持、運営をも含めた資源管理技術が必要ではないかと思えます。そのためには我々研究者も新しい感覚で研究を進めなければなりません。漁業者の皆様も古い因習や自分さえ良ければという利己的な考えを捨て、研究者も漁業者も水産業に携わる全ての人々がパイオニアになったつもりで、新時代の水産業発展のために邁進されんことを希望し、釧路在任中、大変お世話になりましたこと、重ねて厚く御礼申し上げて離釧の御挨拶と致します。(九月二〇日記)

釧路水試を離れて

網走水試漁業科長

中山 信 之

昭和三十九年六月に日本海側の中央水試から太平洋海域担当の釧路水試に転動して以来十四年二ヶ月の長きにわたっていろいろとご

指導ご鞭撻をいただき、厚くお礼申し上げます。釧路在勤の前半は、サケ・マス調査と共に釧路から厚岸沖の沖刺し網ニシン、湾内ニシンの調査を手掛けましたが、黄色いダイヤなどと云われた当時のことで、年令査定をするのに鱗一枚の採取を頼んでも、製品価値を落とすと云って渋い顔をされたことなど、今はその来遊が全く途絶えているだけにことさら懐しく思い出されます。

その後は、中村悟氏が海洋水産資源開発センターに転出したため、そのあとを受けてほとんどサケ・マスの調査に専念することになりました。四月末の日ソ交渉妥結とともに続々と漁船が集結すると、調査船による漁海況調査結果の説明会、船団グループ別の漁撈長、局長との漁況の見方や考え方などについての活発な意見交換、あるいは水試のあの狭い場所に海況図を掲げ、額を寄せ合って、この辺を目的地にこのコースで行こうかなどと話し合ったりもして、目の回るような忙しさでしたが、その疲れも忘れさせる活気に満ち満ちた出漁前の光景が今更のように頼もしく思えてなりません。

しかし、漁業をとりまく情勢は二〇〇カイリ時代とともに一変して、今後はまさに次の道を歩むことになると思います。沿岸・近海資源の見直し、そして漁業の再編成等々多くの課題をかかえておりますが、行政・研究・

漁業そして関連業界がよい智恵を出し合つて、この難局を乗り越えなくてはならないと思ひます。

私もこの事を胸に秘めて、オホーツク海で新しい仕事に取り組む覚悟ですので、当地方においての節は是非声をかけていただきまして、一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申しあげますと共に、満ち溢れる道東漁業のバイタリティーを存分に發揮して、北海道漁業の先達となられますよう、皆様ののご発展を心から祈念いたします。(一〇月七日記)

着任雑感

増殖部長 辻 寧 昭

水産関係の仕事に携わるようになってから有珠、常呂(サロマ)、余市(中央)、稚内と移り住み、仕事の関係などでその周辺の地域にも足を運ぶ機会が多くなりました。これらの地域は殆ど予備知識のない所でしたので、常に新鮮な気持ちで興味と期待が一杯でした。

此度、釧路へ転勤を知らされた時は色々の想が胸を掠めました。というのは日高から続くこの管内は、私が海との掛り合いを深く持つようになった地域で、いわば第二の故郷ともいえる所です。即ち、この管内は海岸線の可成の部分で理学的研究の立場から、過去約

30〜15年前に亘つて、数回ないし数十回調査に歩いた所だからです。今度は水産の立場から以前との比較も含めて観て行きたいと思つています。

着任以来管内を一廻りしての概観だけが、変貌の大きさに驚くと共に、昔の面影のある所に懐しさを感じています。今後仕事を通して観察が深まって行くと思ひますが、どう変化しているか大変興味の深い所です。

以上のような訳でこの管内は私個人にとつて良かれ悪かれ、今までに移り住んだ所と違つた感情が働くのは止むを得ないことだと思ひますが、そういった感情を抜きにしても、この管内は今までの他の管内と異つた感じを受けています。一日も早くこの管内の気風を理解し、皆さんと共に仕事に精を出したいと思つておりますので、宜しく御指導をお願い致します。紙面を借り経歴の一端を被露して着任の挨拶を申し上げます。

着任のご挨拶

漁業資源部長 小 島 伊 織

去る八月三日付けで釧路水試勤務を命ぜられ、網走水試から転勤して参りました。

私は北水試に勤務してからちょうど満30年になりますが、その間、中央水試(余市町)や網走水試に籍をおき、紋別分場・室蘭分場

に長期間出張したほか、増毛町など道内の各地の漁業地帯に出かけ、重要魚種の資源調査のほか、海洋調査・漁具漁法試験など広い分野にわたり仕事に従事してきました。ところが肝腎な釧路水試のサービス範囲である十勝・釧路・根室を根拠とする道東太平洋海域では全くその経験がなく、目下とまどいを感じております。

御承知のとおり釧路・根室・十勝は日本の漁業地帯で重要な位置を占めておりますが、反面、二〇〇カイリ問題の渦中にもあり、また漁業構造も複雑多岐のようで、非才な私にとっては、大変な所に赴任してきたものだと心身の引き締る思いがいたします。

したがいまして、関係の皆様方の御指導と御厚情により、土地感を養ひ、浜の具体的な問題点を勉強し、漁業に関する調査研究を推進して皆様方のお役に立ちたいと念願しておりますので、何卒よろしくお願い致します。

なお、水産業の科学技術上の試験研究及び普及指導機関は、当水試のほか国立の北海道区水産研究所や道立の水産技術普及指導所も近くにあるので、これらの関係者と良く提携しながら、より一層のサービスが出来るよう努力するのも私達の重要な任務であろうと思ひます。さらにまた、道内ばかりでなく本州の水産試験場・水産研究所・関係水産団体とも連絡提携してゆくことも必要不可欠でし

よう。

以上に私の経歴と抱負の一端を申し述べ、皆様方の御指導と御厚情をお願い致し、着任の御挨拶に代えさせていただきます。

職員の異動

ことしは次のように三回にわたり比較的大幅な異動があつて、現在の釧路水試の職員総数は四九名で、前より一名少なくなつております。

△昭和五三年五月一日付▽

水産孵化場総務課 小 柳 勝 男

(釧路水試総務課)

釧路水試総務課 上 田 利 幸

(新規採用)

△昭和五三年八月三日付▽

中央水試 場長 奥 田 行 雄

(釧路水試 場長)

釧路水試 場長 小 杉 寛 夫

(網走水試 場長)

網走水試 場長 内 藤 政 治

(釧路水試漁業資源部長)

釧路水試漁業資源部長 小 島 伊 織

(網走水試漁業資源部長)

中央水試増殖部長 田 沢 伸 雄

(釧路水試増殖部長)

釧路水試増殖部長 辻 寧 昭

(稚内水試増殖部長)

△昭和五三年八月二一日付▽

網走水試漁業科長 中 山 信 之

(釧路水試漁業資源部)



◇ ことしの夏は全国的に記録的な酷暑が続き、道東地方も例にもれず、霧の晴れた日は暑さで閉口しました。ところで本紙の発行が予定より大分遅くれたのは、夏バテが原因でなく、八月に行なわれた大幅な人事異動の影響によるものです。

◇ 八月の異動で転動して行かれた方と釧路に着任された方々から本紙に前掲のような御挨拶をいただきました。転出者の長い間の御苦勞に感謝を表わし、今後の御健斗と御発展を祈念いたします。

◇ 年度の前半に発行する釧路水試だよりは、通例、当該年度の事業計画を掲載しておりましたが、今回は、発行が大幅に遅くれたためと、既に六月発行の北水試月報(第三五卷第六号)の水試情報欄で当水試の事業計画を紹介済みなので、割愛しました。

◇ 表紙の写真は、漁業資源部の阿部晃治研究職員が調査の記録として撮影したものです。シラミカジカの胃袋に、毎年このように大量のケガニの子どもが入っているのかと思つたら、そうではなく、大量発生した昭和四九年に顕著に見られた特異な現象とのことです。それにしてもシラミカジカはケガニの子どもの大敵ということになります。

◇ このたび布施正さん(釧路市史編さん事務局長)が釧路新書3として漁業基地・釧路なる小冊子を出されました。平易で読みやすい文章のなかに釧路漁業の本質がよく表わされている好著です。二〇〇カイリ問題を考える上でも大変参考になりますので、ご一読をお奨めします。

釧路水試だより 第42号

発行年月日 昭和53年10月25日

編集発行人 小 杉 寛 夫

発行 所 釧路市浜町二の六

印刷 所 北海道立釧路水産試験場

印刷 所 釧路総合印刷株式会社